

仙台藩茶道石州流清水派と 四代藩主伊達綱村



仙台藩茶道石州流清水派宗家十一世

大 泉 道 鑑

仙台藩茶道石州流清水派（当流）を仙台藩内に確立さ

せたのは、仙台藩茶道の茶道頭三世清水道竿（寛文二

年～元文二年

～一六六二～

一七三七）であ

る。その過程に

おいて、四代藩

主伊達綱村（万

治二年～享保四

年～一六五九～

一七一九）（写

真し）は、実に



写真1. 伊達綱村像
仙台市博物館蔵

大きな役割を果した。そこで今回、綱村の茶道など「伊達文化」の発展に貢献した業績の一端を、縁の神社仏閣や残された文献をたどりながら述べたい。

綱村は、万治二年（一六五九）三月八日、三代目藩主伊達綱宗（寛永一七年～正徳元年～一六四〇～一七一一）と側室浄眼院（三沢初子、鳥取藩士三沢清長の娘）（寛永一六年～貞享三年一六三九～一六八六）の長男（嫡男）として生まれた。万治三年（一六六〇）、父綱宗が不行跡により、二一歳で幕府から隠居を命ぜられたのが、寛文事件と称されたあの有名な仙台藩の御家騒動「伊達騒動」の発端となった。そのため、綱村は弱冠二歳で襲封し、それに伴って、伊達家の重臣の伊達兵部大輔宗勝（一関城主）（元和七年～延宝七年一六二一～一六八〇）と田村右京宗良（岩沼領主）（寛永一四年～延宝六年一六三七～一六七八）がその後見人に任ぜられ、藩政を司った。その後の権力闘争で兵部派は失脚し、右京もその騒動の責任を問われて一時閉門を余儀なくされた。綱村は、延宝三年（一六七五）一七歳の時ようやく入国を果し、施政を執り行った。防風林を設けたり運河の整備に努める一方、寺院や神社の造営に力を注ぐ等、積極的な政策を押し進めた。

なお、綱村が幕府老中稲葉正則（相模小田原城主）（元和九年～元禄九年―一六二三～一六九六）の息女仙姫（万治二年～宝永三年―一六五九～一七〇六）と結婚したため、岳父正則は藩政全般を指導しただけでなく、茶道に極めて造詣が深かったため、その点でも多大な影響を及ぼしたようである。

綱村が藩政の表舞台で活躍したのは元禄時代で、元禄文化が見事に開花した時期である。綱村は特に文教政策を重視し、初めは儒学の振興に力を注いだ。当時、仙台藩には優れた儒学者が多く召し抱えられていたが、そのひとりである田辺希賢（承応二年～元文三年―一六五三～一七三八）に伊達家の正史として有名な「伊達治家記録」の編纂を命じたのは、特筆すべき事と言えよう。

その後、綱村は仏教にあまりにも執心していったため、正則からもたしなめられた事からも、そのひたむきさを窺う事ができよう。ところで、奥州平泉は平成二三年（二〇一一）にユネスコ世界遺産に登録され、各方面から注目を集めている。平安末期、藤原氏三代が築いた中尊寺金色堂、毛越寺の浄土庭園等がある仏教都市平泉に、綱村が深い関心を寄せた事は、想像に難くない。ここ理想郷平

泉の高館とよばれる丘陵地帯の頂上には、悲劇の英雄、源義経（平治元年～文治三年―一一五九～一一八七）の縁かりの義経堂がある。これは、綱村が天和三年（一六八三）に義経を偲んで建立したもので、その中に義経の木像が安置されている。なお、その頂上付近からの眺めは実にすばらしく、東を見ると、ゆったりと流れる北上川や束稲山（東山）を見渡すことができ、西には、前九年・後三年の役の古戦場がある。

綱村は、日本三禅宗（臨済・曹洞・黄檗）のひとつ黄檗宗に帰依していたが、元禄九年（一六九六）黄檗宗両足山大年寺（仙台市太白区門前三番二二号）を建立し、その当時、名僧の誉れの高かった江戸向島弘福寺住持の鉄牛道機禅師（俗姓は益田、号は自牧子、諡号は大慈普応国師）（寛永五年～元禄一三年―一六二八～一七〇〇）を大年寺開山始祖として迎えた。黄檗宗の大本山は万福寺（京都府宇治市）で、この寺は中国福建省から渡来した煎茶道の開山とも言われている隠元隆琦禅師（文禄元年～延宝元年―一五九二～一六七三）により建立された。そのため、大年も万福寺を模して伽藍は中国明朝様式に建てられ、また黄檗宗の儀式作法も明朝時代の儀礼により行われてきた。

藩政時代には、藩から手厚い庇護を受けていたため、栄華を極めたと言われている。しかしながら、明治維新後、寺は急速に衰退したため、往時の威光を偲ぶものとして、惣門（写真2）と二八〇段余りの石段を残すのみとなった。これらを見る度に、古の繁栄していた様子に思いを馳せると、仙台にかつてあった旧制第二高等学校（東北大学旧教養部の前身）教授土井晩翠（明治四年〜昭和二十七年

一八七

一九五二）の

有名な詩「荒

城の月」の一

節「昔の光今

いずこ」が、

頭を過るの

筆者だけであ

ろうか。一見

の価値がある

と思われる。

綱村の遠年

忌法要及び歴



写真2. 大年寺惣門 綱村が建立（元禄九年）

代藩主慰霊祭は、毎年六月二〇日の命日にその遺徳を偲んで、この大年寺本堂及び綱村以降の歴代藩主が眠る墓所（大年寺無尽燈）で、それぞれ厳かに執り行われる。昨年は、日本中を震撼させた、あの東日本大震災の直後であったため欠席させて頂いたが、一昨年のそれには、筆者も仙台藩志会の一員としてまた、綱村が仙台藩茶道の発展に尽力した事に、敬意と感謝の念を持って参列した。武内邦生

大年寺第三四

代住職の読

経により始

り、仙台伊達

家一八代当主

伊達泰宗様に

続き参列者全

員の焼香が行

われた（写真

3）。この法

要後、引き続

き参列者は墓

所前に移動し



写真3. 綱村の遠年忌法要
（平成22年6月20日、於 大年寺本堂）

て、慰霊祭として塔婆供養が行われた(写真4)。

綱村は、前に述べたように神社仏閣の造営・改築に、並々ならぬ力を注いだ。代表的な例として、奥州一宮として名高い鹽竈神社(宮城県指定文化財、塩釜市一森山一)の改築が挙げられるが、現在の社殿は、綱村により元禄八年(一六九五)に着工されたものである。五代藩主伊達吉村(延宝八年〜宝暦元年―一六八〇〜一七五二)の治政の宝永元年

(一七〇四)

にこの神社が完成したが、元禄時代の特徴を色濃く残す建築として貴重な存在である。中門から入って正面に荘厳な本宮(左宮・右宮)の二つの本殿



写真4. 綱村の墓
墓前で歴代藩主慰霊祭(平成22年6月20日)が執り行われた。

と共通の拝殿、廻廊、幣殿、瑞籬(写真5)が、右手には華麗な別宮(拝殿、廻廊、幣殿、瑞籬)がそれぞれ佇んでいる。なお、当流の故十世大泉道鑑(明治四二年〜平成二年―一九〇九〜二〇一〇)を会長として開催された第八回石州流茶道全国大会(仙台大会)の歓迎茶会は、平成八年五月にここ鹽竈神社で行われた。

一方、綱村は鹽竈神社改築の際に境内にあつた

を元禄九年(一六九六)

に当地(仙台市泉区古内字糺一)に移築し、これを下賀茂神社(右宮・東の宮)とした。更に、翌年には上賀茂神社(左宮・西の宮)



写真5. 鹽竈神社本宮拝殿(綱村が改築)

をも祭つたので、現在この二社が仲睦まじく並んで佇む姿はなかなか趣がある（写真6）。この二社は、屋根が、いずれも茅葺、向拝一間、切妻造一間社流造で石造亀腹の上に建てられた。総体は、京都の御本社の丹塗りに習い紅殻塗りにされ、正面両開き唐戸が吊られている。また、向拝の虹梁上には雌鶏（下賀茂神社）及び雄鶏（上賀茂神社）の彫刻がそれぞれ飾られ、また、切妻破風は虹梁太瓶束式でその左右に唐草模様の彫刻が施されてお、江戸時代中期の建築らしい面影を現代に伝えている。なお、この賀茂神社本殿二棟及び棟札二体は、昭和三九年（一九六四）



写真6. 賀茂神社本殿（綱村が造営）
下賀茂神社（右）と上賀茂神社（左）の間に立つ筆者

に宮城県指定文化財に指定された。また、北限地帯でありながら大木に生育した上賀茂神社前のタラヨウ及び大鳥居脇の二本のイロハモミジの大木が、いずれも平成十一年（一九九九）に宮城県指定天然記念物に指定された。

ご承知の通り、綱村は最初石州流の流祖片桐石見守貞昌（石州）（慶長一〇年〜延宝元年—一六〇五〜一六七三）の高弟の茶道頭二世清水動閑（慶長一九年〜元禄四年—一六一四〜一六九二）から茶道の指南を受けた。なお、二世動閑は世に言う「石州流三百箇條」の註解書「清水動閑註解石州流三百箇條」及び「動閑茶湯書」を著わした。この両著書は当流の教典の役割を果してきており、代を継承する印として歴代の当流の茶道頭・宗家の手を経て筆者に手渡された。動閑没後、綱村が自らその後継者に指名したのは、一門で実力が群を抜いていた後の三世道竿、馬場道齋であった。道竿が三世を継承した経緯については、十世大泉道鑑著「清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道」だけでなく、「関」（第二十号）にも詳述されているので、それらを参照して頂きたい。綱村は、元禄五年（一六九二）三世道竿に石州流鎮信派の祖、松浦鎮信（元和八年〜元禄一六年—一六二二〜一七〇三）へ師事するよう命じた。更

に、特別な取り計らいを自ら行つて、石州没後石州流の第一人者となつた石州流宗源派（藤林流）の開祖、藤林宗源（慶長二年～元禄八年―一六〇六～一六九五）に師事させたので、三世道竿は幸運なことに直接宗源から台子伝授を受ける事ができた。このような経過をたどり、綱村は、三世道竿から当流の茶道の指南を本格的に受けるようになった。

さて、綱村の治世の「青山公治家記録」の寛文九年（二六六九）三月一九日条に当時一一歳の綱村の茶会に関する最初の記述が見られ、次の茶会の記事は、延宝元年（二六七三）一〇月である。ところで、三世道竿が茶道頭に任ぜられたのが、元禄五年（二六九二）であり、その翌年以降、茶会の記事が増加の一途をたどった点が注目される。元禄六年（二六九三）から宝永二年（一七〇五）までの一三年間の綱村の仙台城及び江戸邸における茶会は、実に一三〇〇回以上も催されている。その冒頭の元禄六年の一〇月二三日の茶会では、岳父正則の嫡子老中稲葉正通（後の正往）（寛永一七年～享保元年―一六四〇～一七一六）を招き、伊達政宗（永禄一〇年～寛永一三年―一五六七～一六三六）が徳川家康（天文一一年～元和二

年―一五四二～一六一六）から拝領した名品清拙墨跡が床に飾られた。なお、正通は石州の高弟で、傑出した数寄大名との誉れが高い。また、綱村の晩年の元禄一五年（二七〇二）に行つた茶会は実に三三六回にも達している。これらの記録からも綱村が茶道にいかに精進していたか、その様子が目に浮かぶようである。

綱村が頻繁に茶会を催しただけでなく、茶道の探求に励み、その奥義を極めた事をよく示す資料が少なからず残されている。その代表的なものとして、宗源、二世動閑及び三世道竿らの記録や談話を研究して会得することができた茶道の精神について記した「数奇秘密相伝」（写真7）をまず挙げる事ができる。次に、綱村著「如幻三味集雑著」に収載されている「茶人説」（写真8-1、8-2）及び「茶説」（写真8-3）がある。これらには、茶人のあり方及



写真7. 数寄秘密相伝
綱村著 仙台市博物館蔵

び茶道の精神についての考えがそれぞれ述べられている。この詳細についても「清水動閑 註解石州流三百箇 條付仙台藩茶道」に記述されているので、その箇所を参照されたい。

以上述べたように、綱村は清新な気風がみなぎった元禄文化を背景に、文教政策を積極的に推進した高度な文化人だったと言える。特に、三世道竿を側面から支えながら

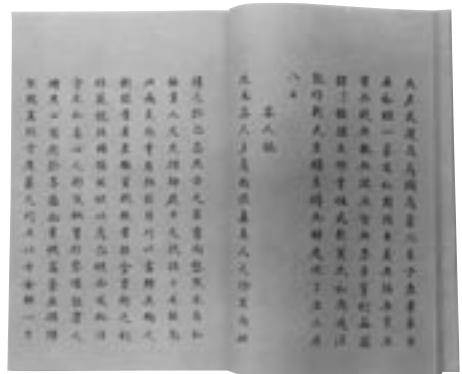


写真8-1. 茶人説
綱村著 仙台市博物館蔵

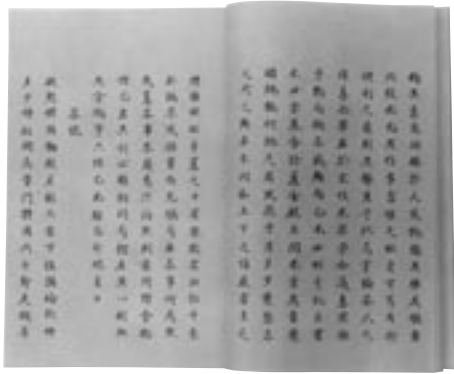


写真8-2. 茶人説(続き) 及び茶説
綱村著 仙台市博物館蔵

当流の確立と更なる発展に大きく貢献した立役者だった事は、紛れもない事実である。このような理由から、綱村が日本屈指の数寄大名として高く評価され、また、専制政治に

対する批判はあるものの、仙台藩の歴代の藩主の中で、名君の一人として後世に語り継がれた所以^{ゆえん}であろう。

元禄一六年（一七〇三）、綱村は養嗣子の吉村に後を託して隠居した。享保四年（一七一九）六月二〇日没す。享年六一。法名は大年寺殿青山全堤大居士。

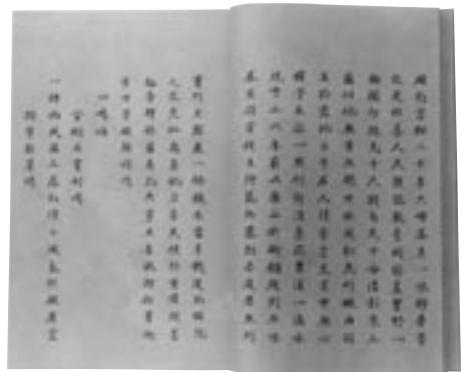


写真8-3. 茶説(続き)
綱村著 仙台市博物館蔵

参 考 文 献

(五十音順)

『関』(第二十号) 全日本石州流茶道協会 平成二十二年

『原色茶道大辞典』 井口海仙、末宗広、永島福太郎監修

淡交社 昭和五〇年

『講談社 日本人名大辞典』 上田正昭、西澤潤一、平山

郁夫、三浦朱門監修 講談社 平成二二年

『清水動閑註解石州流三百箇條』 清水動閑 十世大泉道鑑蔵

『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』 十世大泉

道鑑 丸善出版サービスセンター 昭和五五年

『数奇秘密相伝』 伊達綱村 仙台市博物館蔵

『仙台市史・通史・近世②』 仙台市史編纂委員会 平成二六年

『伊達家治家記録』 仙台市博物館蔵

『伊達綱村茶会記』 酒井巖 中央公論事業出版 昭和四三年

『茶人説』『茶説』(如幻三昧集雑著) 伊達綱村 仙台市

博物館蔵

『動閑茶湯書』 清水動閑 十一世大泉道鑑蔵

『宮城県の文化財』 宮城県教育委員会編 (財)宮城県

文化財保護協会 平成五年

